

## 文 献 総 覧

## 精神薄弱児の類型学的研究の現状 (その4)\*

——環境的 deprivation による心因性精神薄弱児をめぐる——

神戸大学

伊 藤 隆 二\*\*

## I 問 題

さきに AAMD (報告者 Heber, 1958) によつて発表 (1961年に改訂) された精神薄弱児の分類は、米国はもとより他の諸外国の精神薄弱児の類型学的研究に強い影響を与えはじめている (Stevens and Heber, 1964)。わが国でも日本児童精神医学会 (1964) が中心となつて、この AAMD 分類法をめぐる関係者の意見を発表している。ところで、この AAMD 分類については筆者がすでに前回の報告 (伊藤, 1961, 1962) でもふれたが、8つの分類カテゴリーの8番目に、「不確実な (心理的と推測される) 原因による精神薄弱」という項目が設けられ、その下位分類に、『文化性・家族性精神薄弱』『環境的デプリベーション (environmental deprivation) にともなつての心因性精神薄弱』『情緒障害および精神病的な人格異常にともなつての心因性精神薄弱』の3つの項目がおかれている。今回はこれら3つの下位分類のなかで、とくに『環境的 deprivation による心因性精神薄弱』について文献的に評論を試みる。

上記の AAMD 分類法によれば、この環境的 deprivation による心因性精神薄弱とは臨床的にも既往歴の上からも知能遅滞を正当に証明することができるような器質的疾患がまったく認められず、心理社会性要因——とくに幼少年時の学習経験の機会が剥奪されたことに帰因する——による知能の恒久的遅滞がある場合を指す、と説明されている。

一般に精神薄弱の主徴候は知能の発達障害があることと、その発達遅滞が恒久的 (permanently) であること

(文部省, 1953; Porteus and Corbett, 1953) の2点であり、その発達障害・遅滞の原因は遺伝か脳の正常な発達に対する外的阻止条件 (外因) があつた場合が考えられており (伊藤, 1960), ソ連教育科学アカデミアの発表 (1963) も「大脳中枢神経に被むつた器質的障害」のみを精神薄弱の原因としている。そこで AAMD 分類法にみられるところの原因が環境的 deprivation によること、および、その精神遅滞が恒久的であることの2点は多くの論議をよぶところとなる。また、環境的 deprivation による精神薄弱の存在の解明は精神薄弱出現の予防という問題に対しても示唆を与えることになる。

## II 原因が環境的 deprivation

## である精神薄弱

deprivation という現象は Pringle (1965) によれば、(1)正常な家庭生活から離別され、孤児院や収容施設に住んでいる場合、(2)両親とくに母親から拒否され、愛されていない場合、および(3)環境的・教育的に極度に刺激がない場合にあらわれると説明されている。(1)は子ども自身の長期の療養のためや、親の死・生別、家庭の崩壊 (broken home) などのために正常な家庭生活を送ることのできない場合であり、(2)は両親といつしよに生活しているのだが精神的に親子分離をきたしている場合 (Bowlby et al, 1956; Bowley, 1947, 1951; Fitzgerald, 1948; 高木, 1960) で文化環境的というよりは情緒的 deprivation というべきであろう。(3)は文字どおり人間社会から隔離された野生児とか人里離れた山の中に住んでいる子どもをはじめ、低文化環境ないしは極度の貧困生活を送らざるをえない人びとの場合におこると考えられる。

まず(3)の場合から考えてみる。歴史的に、なんらかの理由で人間社会から絶縁され野生動物と同じような状態

\* The outlook of the typological studies on mental deficiency. : IV—On mental retardation associated with environmental deprivation. —

\*\* by Ryuji Ito (Kobe University)

で生きなければならなかつた人間についての記録は少なくないが、学問的価値からいつて、第1にあげられるのは1799年にフランスのアヴェロン (Aveyron) で発見された野生児についての Itard の教育研究 (1894) であろう。かれの血の出るような5年間の努力も効を奏せず、この野生児が正常な発達をとり戻せなかつたとき、この子はもともと白痴であつたのだという声が出て、人間の環境的 deprivation が精神の発達障害ないしは遅滞の原因となるかどうかは実証されずに終つてしまつた。ところがそれから1世紀以上も経つた1920年にインドのミドナポール (Midnapore) で狼に育てられた7才と2才と推定される2人の人間の子どもが発見され、再び環境的 deprivation と精神発達障害の問題が抬頭してきた。それは Zingg 夫妻の記録 (1940, 1941) に注目し科学的に分析を試みた Gesell, A. の報告書 (1941) が出されたこと、この報告書をめぐつて各国の社会心理学者 (たとえば Dennis, 1941a, 1941b, 1951; Smith, 1954) らの間で論議されたことによる。Smith はこの野生児たちは家庭から分離されたという事実がすでに情緒障害 (emotional trauma) をきたしていたこと、また継続的学習強化の欠除が決定的な原因であろう、とその精神遅滞現象を環境的 deprivation から論じたが、Dennis はこの子どもたちはもともと精神薄弱であつたうえに、森の中で生活していた期間がきわめて短かつたのだと主張し、精神遅滞を直接、環境的 deprivation に結びつけることに反対した。これに対し Zingg (1941) は子どもたちが狼の習性や動作を完全に身につけていたことは精神薄弱や短期間の生活では不可能なことだと反論しているが、三隅 (1954) も指摘しているように野生児の精神遅滞を単純に環境的 deprivation に結びつけることは困難であろう。その点、Davis (1947) が報告した生後6週後からまる4年間離小屋に入れられていた幼児についての実験例は一時的な精神遅滞が環境的 deprivation と深く関係していることをかなり妥当な線で証明しているといえる。すなわち4年後にその幼児が発見されたときは Binet テストでMA19カ月、Social Maturity テストでSA2才半であったのが、その後の系統的指導によつて知能が急激に改善された、というものである。しかし、環境的 deprivation が知能の恒久的遅滞を徴候とする精神薄弱の原因となるか、という問題は否定される。最近福岡県下で発見された10年間家の中に幽閉されていた3姉弟に関する報告 (森本, 1965) も類似の結果を出している点で興味深い。野生児や隔離された子どもの例ほど極端ではないが、乳幼期の環境的 deprivation の例としてよく引用されるのは Dennis (1935, 1940, 1941b) の

報告するアメリカ・インディアンの一族である Hopi 族および Navajo 族の独特の育児法の精神発達に与える影響に関する研究と、Gordon (1923) の英国の canal boat の子どもとジプシーの子どもの精神発達に関する研究である。前者は Hopi 族の習慣として生後3カ月間、手足を動かさないように毛布の中に入られた乳児の発達が心身ともに遅れるが、しかしその期間が過ぎると徐々に回復するという報告であり、ドイツの Danzinger と Frankl (1934) の Albinia の子 (この場合は生後1年間、揺りかごにしぼりつけられて育つ) に関する研究でもほとんど同様の結果が報告されている。後者は canal boat の子どもジプシーの子ども学令前はいずれも IO 70 前後ないしはそれ以下であるが、年令の増加につれて80前後に上昇するという報告である。人里離れた山の中で育つた子どもの精神発達に関してもいくつかの報告があるが、Wheeler (1932, 1942) がアメリカ東部テネシーの山の子ども (6才-16才) 1,147人の知能をしらべた研究と Asher (1935) がケンタッキー山間部の僻地の子ども (7才-15才) 300人の知能をしらべた研究および Sherman (1945) がワシントン特別市から約100マイル離れた Blue Ridge 山の4つの地区の子ども (6才-16才) 1,079人について同様、知能テストを実施した結果は統計的にも信頼されている。すなわち Wheeler の報告では6才で IQ 平均が 94.7, 11才で 80.0, 16才で 73.5 と年令の増加とともに測定知能の方は下降傾向を示しており、Asher, Sherman も大同小異の傾向を見出している。Sherman の報告によれば6-8才で IQ (Pintner Verbal Test, Goodenough Man-Draw Test など4種のテストの結果) は 80-94, 8-10才で66-90, 10-12才で53-87, 12-14才で67-83, 14-16才で52-87の範囲に分布していたという。わが国では最近、広島大学 (1965) が中心になって豊島という離島に住む全学童 (6才-12才) 999人について行なつた精神医学的調査結果が注目されているが、離島 (僻地) 独特の現象のひとつとして「僻地性精神薄弱」の存在が認められたという (武村ほか, 1965)。

山間僻地ないしは離島という環境的 deprivation が精神発達の阻害条件になっていることはこれらいくつかの報告からも推測されるところであるが都市 (または上層階級) の子どもにくらべて農・漁村 (または下層階級) など文化的水準が低い地域に住む子どもも精神発達が遅れがちであるという報告も多い (津守, 1954)。米国で社会階層とそこに住む子どもの知能との関係を研究した最初の人 Weintrob ら (1912) で、それは上層・中間層・下層を代表すると推定される地域に住む子ども (8-

12才)にBinet-Simon Test を実施し、上層群と下層群の間に著しい差がみられたというものである。この報告が発表されて以来、社会階層と知能の関係および知能テストそれ自体の妥当性の問題が大きくクローズアップされてきたわけであるが、今日でも未解決である (Krishef, 1959; Eells et al, 1951)。わが国でも古くは桐原 (1924)、丸山 (1927)、最近では中島 (1955)、江川 (1956, 1958)、労働科学研究所 (1960)、小見山 (1964) らが、この問題の解明のために取り組んだが、結果的に上層群は下層群より IQ が高かったという結果が報告されているのみで、そのメカニズムは解明されていない。テスト法の妥当性をめぐっては Binet テストが上層群向きにできているとか、標準化に際してとられた母集団が上層群に偏向していたとか、下層群は受験時の動機づけ motivation が弱いからとか、時間制限法では不利である、などの欠点をあげている人が多い (Haggard, 1954) し、事実、これらの欠点を補うと、上層・下層群間に差がなかったという報告 (Whiting and Child, 1953) も出ている。また、テスト項目でも上層群では抽象語 (bookish word) は下層群より有意に理解力差があつたが、日常語 (public language) や “cutting tools の分類” など実際的な問題では差がなかったという報告もある (Eells et al 1951; Bernstein, 1958, 1959, 1960)。しかし前述の Pringle のいう環境的 deprivation の意味からいうと、単に下層階級とか貧困という条件をそのまま deprivation と考えることは正当ではない。むしろ deprivation が知能発達障害ないしは遅滞の原因であるならば、その心理的メカニズムを究明する努力こそ必要で、形式的な相関関係を表示するだけで終つていたら問題の解決にはならない。そこで Pringle のいう (1) 家庭からの分離、および (2) 親子分離の子どもの精神発達に及ぼす力学的な心理的作用を掘りさげて究明することが要請されてくる。たとえば、条件の変化が知能に発達的に変化をもたらす場合のメカニズム、あるいは外的操作による知能の変化の様相などに関する研究である。

### III 環境の変化と精神薄弱児の 知能の発達促進との関係

こうした研究のなかから、今回は家庭からの分離、養子家庭・孤児院・収容施設への移動、下層階級 (または僻地・農漁村など) から上層階級 (または都市) への移動、および、教育的操作にともなう精神薄弱児の知能の発達促進の現象に関する研究を概観する (なお、親子の感情面での分離または共生性などの親子関係の障害 maternal deprivation の知能発達への作用については

稿を改めてとりあげる)。

子どもが家庭から分離されるのは子ども自身の病気の治療のための長期入院、親の生・死別、戦争や事故による家庭の崩壊などの場合が考えられる。長期入院児童の知能をしらべたものに Lurie et al (1932), Bowlby et al (1956), Aldrich et al (1945a, 1945e, 1946), 池田 (1955), 嶋田ら (1965) の報告がある。Lurie らは 8 年間入院中の精神薄弱児 55 人について知能だけでなく、心理療法の効果の有無、出身家庭の環境、病気の回復度などについてもしらべているが、心理療法の効果は全般に顕著であつたこと、のぞましい家庭環境からきた子どもほど回復が早いこと、知能の低下は認められなかつたことなど報告している。Bowlby らの報告からも入院児の知能低下はほとんど認められなかつた。しかし Aldrich らは入院中の乳児は家庭にいたときよりも泣き方がはげしく、泣く頻度も非常に多かつたと述べ、家庭からの分離が精神発達に与える悪い影響を心配している。また、戦災孤児の精神遅滞ないしは退行現象を問題にした研究者も多くあり、とくに第 I 次大戦後の孤児についてしらべた Hetzer (1932)、第 II 次大戦後の問題児の知能を研究した Carey-Trefzer (1949)、Burlingham (1954) らは、孤児の大部分の者は知能の面で正常児よりおくられていることを指摘し、いわゆるホスピタリズムに関する研究を促した (田坂ら, 1965; 辻村, 1960; 守屋, 1964)。最近のホスピタリズムの研究からも、孤児院や施設に収容されている子どもが知能遅滞を示している場合が多いことが知られている (Lewis, 1954; Dennis, 1960; 辻村, 1960)。しかしその反面、興味をひくのは精神薄弱児の場合はむしろ、家庭から離れて施設に収容されている方が知能の上昇傾向を示す、という報告が出されていることである。たとえば Clarke (1954, 1958a, 1958b) は非常に悪い家庭環境で育つていた 25 人の精神薄弱児と、同様の状態にあつた 36 人の正常児を同一の施設に収容し、3 年後と 6 年後に WISC を施行し、両群を比較したところ、精神薄弱児群の方は 3 年後には 9.7、6 年後には 14.1 (正常児群はそれぞれ 4.1, 10.4) 上昇したと報告しているし、Stippich (1940) は刑務所に収容された精神薄弱の母親 48 人 (IQ 60-63) の精神薄弱児 48 人を設備が貧弱で環境的には不良な施設に、1 才前後の時に収容したところ、子どもたちが 5 才になつたとき、IQ 平均は 83 で、母親のそれより 20 点も高くなつていたと述べている。ちなみに IQ 平均 102 の正常な母親 (受刑者) の子どもたち (IQ 平均 102) が同じ施設に、ほぼ同じ年令のときに収容され、同様 5 才になつたときの IQ は平均 97 に減少していたという。また、Ke-

phart (1940) も類似の研究をし、同様の結果を得 (とくに外因性精神薄弱児より内因性精神薄弱児の方の上昇率が高かった), 精神薄弱児は自分の家に住んでいる期間が長いほど IQ の低下は続くであろう, と警告を発しているほどである。もつとも, IQ 50-75才, CA 7才-15才の内因性精神薄弱児 6人を対象として行なつた Badt (1958) の研究と, IQ 48-83, CA 14才-20才の精神薄弱児 26人を対象とした Griffith と Spitz (1958) の研究からは施設に収容されたものはその期間が長いほど知能のおくれはひどくなり, とくに抽象語ないしは上位概念 (たとえばオレンジを「くだもの」などの概念で答えること) が困難で, 用途的説明 (「たべるもの」という答) の域にとどまつてしまう傾向が顕著に認められている。

しかし, こうした研究報告には, 孤児院や施設での生活状態——対人関係ははじめ子どもの精神発達にかかわるもろもろの要因——についての分析結果がほとんどみられない。同様の不満は次の諸研究についても感じられる。すなわち, 子どもが施設にいたときよりもすぐれた養家で養子として育てられるようになってから IQ が急激に上昇することを証明した Goldfarb (1943, 1945a, 1945b,) の研究, 2才未満で実母 (IQ 平均 49) と別れた 16人の精神薄弱児が養子として養父母のもとで育てられた場合 IQ 平均 100.5 になり, 一方, 12-15才まで精神薄弱の母親のもとで育つた子どもの IQ 平均が 53であつたという Speer (1940) の研究, また, 4才未満で実母 312人 (IQ 90 以下, IQ 平均 70) から別れた 312人の子どもたちが養父母のもとで育てられてからの IQ と実母の IQ との相関は .31 に過ぎなかつたという Snygg (1938) の研究などである。また同様に, 多くの論議をまきおこした研究であるが, 1940年前後から大規模におこなわれた Iowa Child Welfare Research Station での「環境刺激の知能発達に及ぼす効果」に関する一連の研究 (代表者 Wellman) にも触れないわけにはいかない。この研究報告についてはこれまでに広田 (1963), 岡本 (1954) らによる紹介が出されているので, 筆者はこの Iowa 研究およびこれに刺激されておこなわれた, とくに精神薄弱児についての「教育操作による IQ 変化」に関する研究をとりあげることにする。Wellman の報告のひとつ (1940) は 2才から 6才までの幼児について 1年保育 (652人), 2年保育 (228人), 3年保育 (67人) 経験が幼児の IQ の上昇の条件になりうるかどうかをみているが, その結果, 毎年秋と春の 2回の Binet テストによる測定値は最低 1.7 から最高 7.7 (保育期間の長い方が上昇率が高い) 上昇していた。Skeels と Dye (1939) の報告はさらに驚異的で, はじめ精神薄弱であつた子ど

もが, 精神薄弱者のための収容施設で, 軽愚級の年長女子精神薄弱者の世話を受けて数カ月後に, 正常知能になつたというのである。これと類似の報告はそれより 1年前に Skodak (1938) によっても発表されている。すなわち, 就学前の IQ が 80 台の子どもたち 154人 (その実母たちの IQ 平均は 87.7, 精神薄弱者 13.8%, 境界線級の者 30%) を中流以上の家庭で養子として育てたら, 1年後には IQ 平均 116 に上昇したというのである。さらに Skeels et al (1938), Wellman (1944) の報告では社会経済的地位のきわめて低い地域の孤児を保育所に入れて指導を受けさせた実験群 59人 (2才-6才, IQ 75 以下の精神薄弱児と IQ 80 以上の子ども) は指導効果が顕著で, IQ の上昇率も高かつた, とある。これらの Iowa 研究に対しては Goodenough (1940), McNemar (1940a, 1940b, 1945), Simpson (1939) らが, 見本選択の偏り, 実験条件の粗雑さ, 解釈の主観性, 統計的処理の誤り, 上昇 IQ の恒常性の不当性などの諸点を批判している。なかでも, McNemar は実母の IQ の妥当性, 母親自身の貧困に陥つた原因およびその影響, 実父の IQ, 就学前幼児に対する知能テストの信頼性などの諸点がいまいだと鋭く批判した。これらの非難に対する Wellman ら (1940) の回答は科学性が乏しく, かつ感情的になつている感じが強く, 第三者には満足されない面が多いようである。その後のこの種の教育効果に関する研究からは, IQ 上昇に効果がないとするもの (Anderson, 1940; Dennis, 1935; Goodenough and Maurer, 1940; Thorndike, 1940a, 1940b など), 効果を認めたとするもの (Dawe, 1942; Lorge, 1945 など) に分かれ, 結論は出ていない。なかでも Lorge は 131人について 20年間にわたる縦断的研究を発表しているが, IQ 69-78 の人が第 8 年次を卒業するまでに 20.7 上昇し, さらに大学を卒業するまでには 38.0 上昇したと報告しているのに対し, Worbois (1942) は山村僻地の 1 教室だけの小学校に入学した子どもと, 教育がいきとどいている大きな合同学校に入学した子どもとの比較研究で, はじめの 1-2 年間は教育効果に差があつたが 3 年以後はもはや差が認められなかつた, といっているのは対照的な結果だけに興味深い。

精神薄弱児のための特殊学級での指導効果については Schmidt (1946), Kirk (1952, 1958), Chambers (1956) が組織的に検討している。Schmidt の報告によると, 特殊学級入級時 IQ 50 前後 (SQ は 60 前後) だつた精神薄弱児たちが 3 年間の特殊教育を受けたときは IQ 70 台 (SQ は 80-90), さらに 8 年後には IQ 80-90 (SQ は 80-107) に上昇したという。なお, この報告に対しては

Kirk (1948) の批判と、それに対する Schmidt (1948) の回答も出ているし、また、Goodenough (1949) の論評も発表されている。Kirk は精神薄弱幼児 (3才-6才 IQ 45-80) を保育園に通園して教育を受けるグループ、施設内で保育を受けるグループ、学庭にいるグループ、施設で生活だけしているグループの4グループに分け、3年—5年後の成果を比較したところ、通園にしろ、施設内にしろ、保育 (指導) を受けた子どもの70%はIQで約20上昇し、原因別でみると、知能の遅滞が環境からきていると推定される精神薄弱児の79%、脳器質的障害のある子どもの50%が、IQが上昇したという。しかも指導 (特殊教育) を受ける時期が早ければ早いほどそれだけ効果が顕著であると結論し、精神薄弱児に対する早期教育の重要性を強調している。しかし「正しく診断された真性 (true) 精神薄弱は教育によつてけつして正常 (average) にはならない」と念をおしている。なおこの他、山村僻地の子ども (IQ 70) が都会の高等学校に進学してから正常知能に上昇したという Nietz (1928)、Wheeler (1942) の報告、ニューヨークのスラム街に住む黒人児童が都会での教育を受けた期間が1年以下ではIQ平均が81.4、1-2年では84.2、2-3年では84.5、3-4年では85.5、4年以上では87.4と漸次高くなつていた、という Klineberg (1935) の報告、さらに施設を退所してからの精神薄弱児の予後の状態は比較的良好で、正常者とほとんど差異がみられない場合もあつたという報告 (次節IV) などもあり、IQの変動に及ぼす環境要因の強さが示唆されている。しかし環境要因だけではなく、下層階級に住む低所得者で栄養をじゅうぶんにとれないでいる妊婦に、実験的に、十分に栄養を摂取させたグループと、そうしなかつた対照群からそれぞれ生まれた子どもが3-4才のときのIQを比較したところ、実験群の子どもたちの方が有意差をもつて高かつたという報告 (Harrell et al, 1955) や隔離によつて素質そのものが低下すると説く学者 (Fisher and Fisher, 1950; Hunt and Cofer, 1944) もおり、知能発達を規定する要因は複雑である。それだけに、単に施設に收容されているとか、刺激が少ない環境で育つたという一面だけから知能遅滞 (しかも恒久的遅滞) を意味づけることは困難であろう。また、環境の変化や外的操作によりIQが変化したといつても Hebb (1957) のいう「生得的可能性としての知能」の変化なのか、「脳の機能の仮説的水準としての知能」の変化なのか、あるいはテスト状況なりテスト項目の問題に過ぎないのか、の判断も困難である。結局、環境的 deprivation が精神薄弱の原因とみなしうるかを決定するのは、こうした研究からだけでは無

理なことだとも考えられる。

#### IV 精神薄弱の incurability について

前節でふれたように Kirk は真性 (true) 精神薄弱児はいかなる教育的操作によつても正常 (average) にはなりえないと述べ、精神遅滞の incurability を支持しているし、さきにあげた文部省の定義 (これは Doll の定義を参考にしていてと考えられる) でも「恒久的」遅滞を規定のひとつに加えているし、Doll (1940a, 1940b) も精神薄弱を規定する6つの基準のひとつに “be essentially incurable” というこぼを入れている。精神薄弱の incurability については賛否の対立した意見が出ている (Cantor, 1955; Clarke and Clarke, 1955; 名久井, 1964 など) は反対) が、名久井も指摘するとおり「精神薄弱が incurable か否かを判断するには、かつて精神薄弱と正しく診断されたものが長い歳月の後に、なお変わらないものであるかを経験的、実証的に確かめなければならない」ことなのだろう。前節で概観したとおり、IQの恒常性といい、知能遅滞の恒久性といい、いつたいどんな方法で検証するのがのぞましいのだろうか。IQの恒常性に関してはこれまでも Alper and Horne (1960)、Bayley (1949)、Sloan and Harman (1947)、Thorndike (1940a)、狩野 (1960) などのすぐれた研究が報告され、その恒常性を支持している人が多い。しかし残念ながら精神薄弱児に関するすぐれた縦断的研究は少ない。しかも、むしろ精神薄弱の場合は、その予後に関する研究結果からは、かなり否定的な数値が多く出されている。たとえば Baller (1936) は公立学校の特殊学級卒業生で10年以上を経過したIQ70以下の206人 (21-34才) について、就職状況、結婚、家庭生活状況などを調べたところ、軽度精神薄弱者が多かつたためか、その予後は良好で全員が社会に適応していたという。Charles (1953, 1957) はこの研究をさらに発展させ、151人についてさらに詳細にしらべた結果、24人が死亡 (男子が多い)、3分の1が一般人とほとんど変わらない社会生活をし、生活保護を受けているものは2分の1以下にすぎなかつた。また80%は結婚し (これは国民全体の同年令平均よりわずかに少ない程度)、結婚した人は平均2.03人の子を持ち (これも国民全体の平均よりわずかに少ない)、その子どもたちのIQは50-138に分布し (平均95)、精神薄弱児施設に收容されていのはわずかに2人にすぎなかつた、という。Charles は結論として、学令期に精神薄弱と診断されたもののうち、約20%は終生変わることのない絶対的欠陥 (absolute deficiency) を示し、10%はテスト結果では精神薄弱であつたけれども、予後は社

会に適応し、約65%は境界線級 (dull normal) または正常 (average) であり、約5%は仮性精神薄弱 (pseudo-feble-mindedness) を思わせる障害があつた、と述べている。同様に精神薄弱者の予後が良好だつたという報告は Muench (1944), Keplan (1944), Mickekon (1947) などを出している。たとえば Muench は精神薄弱養護学校を卒業してから18年を経過した8人について Binet テストで知能をしらべたが、1916年版では IQ 平均 80.3 で、15.4 の増、1937 年版では平均 91.1 で 27.2 の増で、社会適応もきわめて良好であつたという。わが国でも 1943(昭和18) 年に、村松ら (1943) が東京・埼玉・大阪・福井・下関などで学令期に学業成績のはなはだしく悪かつた男子 117人、女子 53人が、20代から40代になつたときの状態をしらべているが、なかには生活能力も低く、独立して生活していけない人もいたが、がいして社会適応はよく、なかには IQ 70 で学業成績がいつも最低であつた男子が、39才の現在では多角的農業経営をなし、妻子 5 人で円満な家庭を築いている例もあつたという。特殊学級卒業生の実態調査は杉田ら (1961)、全特連 (1965) が、また、精薄児施設退所後の精神薄弱者の実態については国立精神衛生研究所 (菅野ら 1964a, 1964b; 桜井ら 1964)、日本精神薄弱者愛護協会 (1965) が調査している。がいして IQ 50 以上 (60 以上は 100% 近く) の人の就職率は高く、職場や社会での適応状態も良好で、村松のあげた例のように、結婚し、責任ある仕事を分担し、かつ任務を遂行している例も多くあがつている。このことに関連して、学令期の精神薄弱児の出現率 (IQ 75 以下は 4.53%, そのうち特殊教育の対象とすべきもの——IQ 46-75——は 4.25%) と成人精神薄弱 (0.53%) 者の出現率とが著しくぐいちがつていることに注目しなければならない。成人の場合は死亡による減少は勘案しなければならないにしても、現実これほど大きな差異はあるとは考えられない。この辺に精神薄弱の incurability に対する疑義をはさむ余地があるのかもしれない。いずれにしても、精神薄弱、とくに環境的 deprivation によると推定される軽度 (あるいは境界線級) 精神薄弱の診断判別 (とくに将来の予測) はきわめて困難で、予測がはずれた場合 (誤診) の逃げ道として、やむをえず「仮性」精神薄弱ということばがつくられた、としか考えられない。この仮性精神薄弱という概念はすでに19世紀末に Michael Smith によつて pseudo-feble-mindedness として記載されて以来、心理学のみならず精神医学の教科書にも種々記述されてきたが、Benton (1956) によれば、脳の領域における決定的な欠陥をもつたものが「真性」(true-)精神薄弱といわれるの

に対し、「仮性」(pseudo-) のものは行動現象上は真性精神薄弱と同一だが、その現象をもたらししたのは脳の欠陥ではなく、盲・ろうのような感覚的障害や文化的環境的状态 (ここでいう環境的 deprivation を指すと考えられる) および情緒障害、脳性マヒなどの非定型的原因である、という。また、Delay (1952a, 1952b) は未熟な行動を含む分裂性人格異常も仮性精神薄弱と考えられるべきであると述べている。情緒面の発達の未熟性 (emotional instability) を仮性精神薄弱ないしは精神発達障害の条件として規定している学者は少なくない (Jastak, 1949; Bijou, 1939; Borstein, 1930; Bergler, 1932 など)。なお、脳障害によらない知能遅滞 (とくに仮性精神薄弱) については上述の環境的 deprivation の面よりも、maternal deprivation の点 (たとえば早期の母親の愛情剥奪が知能発達を抑制するなど) から論ずる学者も多い (Ausubel et al, 1953; Borstein, 1930; Hellman, 1954; Jervis, 1959; 牧田ら, 1964)。Jervis は知的発達の遅滞の要因として情緒障害の存在が認められるものを、non-psychotic nature の情緒障害による仮性精神薄弱と分類している。

このように精神薄弱の分類・類型の設定も、また分類作業もきわめて難事業で、1回や2回のテストや面接だけでは不十分で (Arthur, 1947)、20年間、30年間の追跡が必要だという意見が出る (名久井, 1964) のも当然だともいえよう。一方、Kanner (1946) のように絶対的 (absolute) 精神薄弱と相対的 (relative) 精神薄弱を区別することは単純だが当を得ているともいえる。後者はむしろ知的不全 (intellectually inadequate)——生来もつている知能を十分に活用することができない状態——とよぶのが適していると考ええる。精神薄弱を「恒久的」知能発達の遅滞と規定する場合、AAMD 分類法にある環境的 deprivation (および親子間の maternal deprivation) による精神 (知的) 発育不全のものをも同一内容に分類することは危険なことではないだろうか。

## V 結 語

ここで再び「精神薄弱」の規定およびその方法が論議されなければならない。Binet テストが考案されて以来、知能テストの結果が精神薄弱の判別診断に強い規定力をもち、IQ による程度分類が主流をなして今日に至っているものであり、しかも、このような分類で、軽度 (mild) の精薄者は全精神薄弱者の約85%を占めている (Stevens and Heber, 1964) といわれるが、それが妥当性の高い判別によつているか、いま一度慎重に検討する必要はないだろうか。たとえば文部省が 1953(昭和28

年)に精神薄弱児の実態(とくに出現率)調査をした結果でも IQ 75 以下のもので精神科医によつて境界線級と診断された児童・生徒の割合は地域で差が大きく(群馬県 2.7%, 大阪府 4.3%, 徳島県 7.1%), また小学校児童の魯鈍級の出現率は群馬県 2.2%, 大阪府 4.1%, 徳島県 6.1%と著しく異なる。これらの差は地域の特性による差というよりは、判別法の妥当性の低さを示しているといえないこともない。このことは厚生省(1954, 1962)の実態調査ではさらに明確である。しかもこのように、一度精神薄弱と判定された人びとの環境条件の変化, 教育的働きかけおよび学校卒業後の予後などを追跡していつたならば, 相当に異なつた様相を呈してくるのではないだろうか。この予想は上にみてきた多くの文献から推測されるところでもある。なお筆者はこの点について, 養護学校, 精薄児施設を卒業(退所)して15年以上経過した精神薄弱者の現状について調査をすすめている(伊藤, 準備中)。

さて, 分類法については Benda ら(1951, 1963)は心的機能の著明な障害をもつた痴愚や白痴(これらの人びとの中樞神経系の病変の存在は死後の解剖所見から検証されている)と, 知的不全のもの(すなわち環境的 deprivation によると推測される精神発達遅滞)とはまったく異つたグループであるとし, 前者は胎生期の发育障害ないしは出産時または生後早期に大脳に器質的障害があつたか, 代謝や内分泌の障害があつた人びとであり, そうした人びとのみを精神薄弱というべきであると述べ, 暗に AAMD 分類法にある心因性精神薄弱を否定している。また, Brugger (1939), Damon (1941), Slater (1944)らは真性の精神薄弱者は, 環境条件による知的不全のものと比較すると, 種々の身体的徴候(physical signs)が基本的に異なる, としている。

筆者は環境的 deprivation による心因性精神薄弱は AAMD 分類法の説明にもあるように, 「器質的疾患がまったく認められないもの」という条件を入れてある以上, Brugger やソ連科学アカデミアのいう精神薄弱とは明らかに矛盾した存在であり, むしろ仮性精神薄弱ないしは Kanner の提唱する相対的(relative)精神薄弱として厳密に区別すべきではないかと考える。さらに筆者は精神発達遅滞の基本的分類は(A)狭義の遺伝性・家族性, (B)胚種損傷・胎内時・出産時および生後早期の外因性, (C)環境的・情緒的 deprivation の3つであり, これらの3要因が重複した場合も考えて, 結局, ①(A), ②(B), ③(C), ④(A)×(B), ⑤(A)×(C), ⑥(B)×(C), ⑦(A)×(B)×(C)の7通りの分類を設定すべきではないかと考えている。また, 心理学者が知能テストを実施した場合, 5才児も10

才児も15才児もすべて IQ 75 以下という厳格な線をひくことを避け, 低年齢ほど IQ 限界線を緩和し, 高年齢でも IQ 75 という線に固執しない方がよいのではないかと考えている(伊藤, 1963)。これはいうまでもなく IQ は診断のための一資料にすぎないという鉄則を守つたうえでのことである。

環境的 deprivation によつて知能が遅滞している子どもたちの存在は否定できないし(上の(C)の要因が関係する③⑤⑥⑦), そうした子どもたちのためには, まずなによりも環境条件の改善が要請されるし, これはひいては軽度精神薄弱児(知的不全状態にある子ども)の発生の予防につながっていくことになる。Clarke and Clarke (1960), Gray and Parr (1957), Donnison (1954)なども精神薄弱の予防の第1に環境条件の改善(換言すれば deprivation を生じさせない対策を)かかげているのは当をえた主張といえる。そのためには国家的事業として大規模に, かつ, きめこまかく手を打つていくことが必要である。

## 文 献

- Aldrich, C. A., Sung, C. & Knop, C. 1945a The crying of newly born babies. I—the community phase—. *J. Pediatrics*, 26, 313-326.
- Aldrich, C. A., Sung, C. & Knop, C. 1945b The crying of newly born babies. II—the individual phase—. *J. Pediatrics*, 27, 86-96.
- Aldrich, C. A., Norval, M., Knop, C. & Venegas, F. 1946 The crying of newly born babies. IV—a follow-up study after additional nursing care had been provided. *J. Pediatrics*, 28, 665-670.
- Alper, A. E. & Horne, B. M. 1960 Changes in IQ of a group of institutionalized mental defectives over a period of two decades. *Amer. J. ment. Defic.*, 64, 472-475.
- Anderson, L. D. 1940 A longitudinal study of the effects of nursery-school-training on successive intelligence test rating. *39th Yearbook. N. S. S. E.*, II, 3-10.
- Arthur, G. 1947 Pseudo-fecble-mindedness. *Amer. J. ment. Defic.*, 52, 137-142.
- Asher, E. J. 1935 The inadequacy of current intelligence tests for testing Kentucky mountain children. *J. genet. Psychol.*, 46, 480-486.
- Ausubel, D. P., Schiff, H. M. & Goldman, M.

- 1953 Qualitative characteristics in the learning process associated with anxiety. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 48, 537-547.
- Badt, M. I. 1958 Leves of abstraction in vocabulary definitions of mentally retarded school children. *Amer. J. ment. Defic.*, 63, 241-246.
- Baller, W. R. 1936 A study of the present social status of a group of adults, who, when they were in elementary schools, were classified as mental deficient. *Genet. Psychol. Monogr.*, 18, 163-244.
- Baylay, N. 1949 Consistency and variability in the growth of intelligence from birth to eighteen years. *J. genet. Psychol.*, 75, 185-196.
- Benda, C. E., Farrell, M. J. & Chipman, C. E. 1951 The inadequacy of present day concepts of mental deficiency and mental illness in child psychiatry. *Amer. J. Psychiatry*, 107, 721-729.
- Benda, C. E., Squires, N. D., Ogonik, M. J. & Wise, R. 1963 Presonality factors in mild mental retardation. *Amer. J. ment. Defici.*, 68, 24-40.
- Benton, A. L. 1956 The concept of pseudofeeble-mindedness. (in) Trapp, E. P. & Himelstein, P. eds. *Reading on the exceptional child*. New York; Appleton-Century-Crofts.
- Bergler, E. 1932 Zur Problematik der Pseudodebilität. (in) Steven, H. A. & Heber, R. eds. 1964 *Mental Retardation—a review of research*. Chicago; Univ. Chicago Press.
- Berstein, B. 1958 Some sociological determinants of perception—an inquiry into sub-cultural differences. *Brit. J. Sociol.*, 9, 159-174.
- Berstein, B. 1959 A public language —some sociological implications of linguistic form. *Brit. J. Sociol.*, 10, 311-326.
- Berstein, B. 1960 Language and social class. *Brit. J. Sociol.*, 11, 271-276.
- Borstein, B. 1930 Zur Psychogenese der Pseudodebilität. (in) Stevens, H. A. & Heber, R. eds. 1964 *Mental Retardation—a review of research*. Chicago; Univ. Chicago Press.
- Bijou, S. W. 1939 The problems of pseudofeeble-mindedness. *J. Educ. Psychol.*, 30, 519-526.
- Bowlby, J., Ainsworth, M. D., Boston, M. & Rosenbluth, D. 1956 The effects of mother-child separation—a follow up study. *Brit. J. Med. Psychol.*, 29, 211-244.
- Bowley, A. H. 1947 *The Psychology of the Unwanted Child*. Edinburgh; Livingstone.
- Bowley, A. H. 1951 *Child Care—a handbook on the care of the child deprived of normal home life*. Edinburg; Livingstone.
- Brugger, C. 1939 The genetic uniformity of mental deficiency without marked physical sings. *Proc. 7th Internat. Congr.*, Cambridge, 82.
- Burlingham, D. & Freud, A. 1954 *Infants without Families—the care for and against residential nurseries*. London; Allen & Unwin.
- Cantor, G. N. 1955 On the incurability of mental deficiency. *Amer. J. ment. Defic.*, 60, 326-365.
- Carey-Trefzer, C. J. 1949 The results of a clinical study of war-damaged children who attended the child guidance clinic; Hospital for Sick Children, Great Ormond Street, London. *J. ment. Science*, 95, 535-559.
- Chamber, G. S. & Zabarenko, R. N. 1956 Effects of glutamic acid and social stimulation in mental deficiency. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 53, 315-320.
- Charles, D. C. 1953 Ability and accomplishment of persons ealier judged mentally deficient. *Genet. Psychol. Monogr.*, 47, 3-71.
- Charles, D. C. 1957 Adult adjustment of some deficient American children. *Amer. J. ment. Defici.*, 62, 300-304.
- Clark, A. D. B. & Clark, A. M. 1960 Some recent advances in the study of early deprivation. *J. Child. Psychol. & Psychiat.*, 1, 26-36.
- Clark, A. D. B. & Clark, A. M. 1954 Cognitive changes in the feeble-minded. *Brit. J. Psychol.*, 45, 173-179.
- Clark, A. D. B. & Clark, A. M. 1955 Pseudofeeble-mindedness—some implications. *Amer. J. ment. Defic.*, 59, 507-509.
- Clark, A. D. B. & Clark, A. M. 1958a Cognitive and social changes in the feeble-minded—three further studies. *Brit. J. Psychol.*, 49, 144-159.

- Clark, A. D. B. & Clark, A. M. 1958b *Mental Deficiency; The changing outlook*. London; Methuen.
- Damon, A. 1941 Physique in hereditary mental defect—anthropometric study of 97 "old American" female morons. *Hum. Biol.*, 13, 459-472.
- Danzinger, L. & Frankl, L. 1934 Zum Problem der Funktionsreife—Erster Bericht über Entwicklungsprüfungen an albanischen Kindern. *Z. Kinderforsch.*, 43, 219-254.
- Davis, K. 1947 Final note on a case of extreme isolation. (in) Magary, J. F. & Eichorn, J. R. eds. 1962 *The Exceptional Child—a book for readings*. New York; Holt, Rinehart & Winston., 67-68.
- Davis, K. 1948 *Social-Class Influence upon Learning*. Cambridge; Harvard Univ. Press.
- Dawe, H. C. 1942 A study of the effect of an educational programme upon language development and retarded mental functions in young children. *J. exper. Educ.*, 11, 200-209.
- Delay, J., Pichot, P. 1952a La notion de débilité mentale camouflée. *Ann. Medico-Psychol.*, 110, 615-619.
- Delay, J., Pichot, P. & Perse, J. 1952b La notion de pseudo-débilité mentale par arriération affective. *Ann. Medico-Psychol.*, 110, 620-625.
- Dennis, W. 1935 The effect of restricted practice upon the reaching, sitting, and standing of two infants. *J. genet. Psychol.*, 47, 17-32.
- Dennis, W. 1940 The effect of cradling practices upon the onset of walking in Hopi children. *J. genet Psychol.*, 56, 77-86.
- Dennis, W. 1941a Infant development under conditions of restricted practice and of minimum social stimulation. *Genet. Psychol. Monogr.*, 23, 143-191.
- Dennis, W. 1941b The significance of feral man. *Amer. J. Psychol.*, 54, 425-432.
- Dennis, W. 1951 A further analysis of reports of wild children. *Child Developm.*, 22, 153-158.
- Dennis, W. 1960 Causes of retardation among institutional children. *J. genet., Psychol.*, 96, 47-59.
- Doll, E. A. 1940a Foster care for mental defectives. *Training School Bull.*, 36, 193-205.
- Doll, E. A. 1940b Nature of mental deficiency. *Psychol. Rev.*, 47, 395-415.
- Donnison, D. V. 1954 *The Neglected Child and the Social Services*. Manchester: Manchester Univ. Press.
- Eells, K., Davis, A., Havighurst, R. J., Herrick, V. E. & Tyler, R. W. 1951 *Intelligence and Cultural Differences*. Chicago: Univ. Chicago Press.
- 江川亮 1956 児童と青年の都市および農村における知的差異について, 教心研, 4, 102-109.
- 江川亮 1958 鈴木ビネー知能検査の地域差による検討, 教心研, 6, 28-40.
- Fisher, S. & Fisher, R. 1950 Value of isolation rigidity in maintaining integration in seriously disturbed personalities. *J. Pers.*, 19, 41-47.
- Fitzgerald, O. W. S. 1948 Love deprivation and hysterical personality. *J. mental Science.*, 94, 702-711.
- Gesell, A. 1941 *Wolf Child and Human Child*. New York: Harper. 生月雅子(訳) 狼にそだてられた子, 新教育協会. 1955.
- Goldfarb, W. 1943 Infant rearing and problem behavior. *Amer. J. Orthopsychiat.*, 13, 249-265.
- Goldfarb, W. 1945a The effects of psychological deprivation in infancy and subsequent stimulation. *Amer. J. Psychiat.*, 102, 18-33.
- Goldfarb, W. 1945b Psychological privation in infancy and subsequent adjustment. *Amer. J. Orthopsychiat.*, 15, 247-255.
- Goodenough, F. L. 1940 New evidence on environmental influence on intelligence. *39th Yearbook*, N. S. S. Part II, 307-365.
- Goodenough, F. L. & Maurer, K. M. 1940 The mental development of nursery school children compared with that of non-nursery-school children. *39th Yearbook*, N. S. S. E. Part II, 161-178.
- Goodenough, F. L. 1949 Review of Bernadine Schmidt's "Changes in personal, social and intellectual behavior of children originally classified as feeble-minded." *J. abnorm. soc. Psychol.*, 44, 135-139.
- Gordon, H. 1923 *Mental and scholastic tests am-*

- ong retarded children. London: Bureau of Education—Educational Pamphlet, No. 44.
- Gray, P. G. & Parr, E. A. 1957 *Children in Care and the Recruitment of Foster Parents; an Enquiry made for the Home Office*. London: Social Survey.
- Griffith, B. C. & Spitz, H. H. 1958 Some relationships between abstraction and word meaning in retarded adolescents. *Amer. J. ment. Defici.*, 63, 347-351.
- Haggard, E. A. 1954 Social status and intelligence—an experimental study of certain cultural determinants of measured and intelligence. *Genet Psychol. Monogr.*, 49, 141-186.
- Harrell, R. F., Woodyard, E. & Gates, A. I. 1955 *The Effect of Mothers' Diets on the Intelligence of Offspring*. New York: Publ. Teach. Coll. Columbia Univ.
- Hebb, D. O. 1957 *The Organization of Behavior*. John Wiley & Sons. 白井常(訳) 行動の機構, 岩波書店(1957)
- Heber, R. 1958 (revised in 1961) *A Manual on Terminology and Classification in Mental Retardation*. A Monograph Supplement to the American Journal of Deficiency. 64, No. 2.
- Hellman, I. 1954 Some Observation on Mothers of Children with Intellectual Inhibitions. (牧田清志 いわゆる仮性精神薄弱を疑われた児童の治療過程とその精神力学, 児童精神医学とその近接領域 5, (1964) 188-194 による。)
- Netzer, H. 1932 *Die Entwicklung des Kindes in der Anstalt*. (依田新, 環境, 「現代心理学IV」河出書房(1942)による。)
- 広島県豊田郡豊浜村教育精神衛生調査委員会 1965 豊島児童実態調査報告書。
- 広田実 1963 知能発達の促進と停滞について, 心理学評論, 7, 253-272.
- Hunt, J. McV. & Cofer, C. N. 1944 Psychological Deficit. (in) Hunt, J. McV. ed. *Personality and the Behavior Disorders*. New York: Ronald, 971-1032.
- 池田由子 1955 乳幼児収容児の精神医学的研究, 精神衛生研究, 第3巻。
- Itard, J. M. G. 1894 *The Wild Boy of Aveyron*. Trans. by Humphrey, G., 1932. New York: Century. 古武弥正(訳) アヴェロンの野生児, 牧書店(1858)
- 伊藤隆二 1960 精神薄弱児の類型学的研究の現状(その1), 教心研, 8, 112-123.
- 伊藤隆二 1961 精神薄弱児の類型学的研究の現状(その2), 教心研, 9, 44-54.
- 伊藤隆二 1962 精神薄弱児の類型学的研究の現状(その3), 教心研, 10, 113-121.
- 伊藤隆二 1964 精神薄弱の層次的判別, 精薄研, 64, 10-13.
- 伊藤隆二(準備中) 精神薄弱の判別についての心理学的一考察。
- Jastak, J. 1949 A rigorous criterion of feeble-mindedness. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 44, 367-378.
- Jervis, G. A. 1959 The Mental Deficiencies. (in) Arieti, S. ed. 1959. *American Handbook of Psychiatry*. vol. 2, New York: Basic Book.
- Kanner, L. 1949 Feeble-mindedness: absolute, relative and apparent. *Nerv. Child.*, 7, 365-397.
- 菅野重道他 1964a 精神薄弱者の社会適応に関する研究(第1報), 精神衛生研究, 12, 35-72.
- 菅野重道他 1964b 精薄施設退園者の社会的予後調査, 愛護, 11, 1-9.
- 狩野広之 1960 精神的能力の発達に関する遂年的研究, 生活科学協会。
- Kephart, N. C. 1940 Influencing the rate of mental growth in retarded children through environmental situation. *39th Yearbook, N. S. S. E. Part II*, 223-230.
- Keplan, O. J. 1944 Marriage of mental defectives. *Amer. J. ment. Defici.*, 48, 379-384.
- 桐原葆見 1924 社会的生活条件と知能の発達, 労働科学研究, 第1巻。
- Kirk, S. A. 1948 An evaluation of the study of Bernardine G. Schmidt entitled: "Changes in personal, social and intellectual behavior of children originally classified as feeble-minded." *Psychol. Bull.*, 45, 321-333.
- Kirk, S. A. 1952 Experiments in the early training of the mentally retarded. *Amer. J. ment. Defici.*, 56, 692-700.
- Kirk, S. A. 1958 *Early Education of the Mentally Retarded*. Univ. Illinois Press.
- Klineberg, O. 1935 Negro Intelligence and selected

- Migration. New York: Columbia Univ. Press.  
(in) Masland, R. L., Sarason, S. B. & Gladwin, T. eds. 1958 *Mental Subnormality*. New York: Basic Books., 201-259.
- 小見山栄一 1962 最近の知能研究, 心研, 32, 405-413.
- 小見山栄一 1964 標準検査の心理学的研究, 金子書房。
- 厚生省 1954 精神衛生実態調査報告, 厚生省社会局。
- 厚生省 1962 精神薄弱者実態調査結果報告書(昭和36年度)。厚生省社会局。
- Lewis, H. 1954 *Deprived Children: the Mersham Experiment—A social and clinical study*. London: Oxford Univ. Press.
- Lorge, I. 1945 Schooling makes a difference. *Teach. Coll. Rec.*, 46, 483-492.
- Lurie, L. A., Schlan, L. & Freiberg, M. 1932 A critical analysis of the progress of 55 feeble-minded children over a period of eight years. *Amer. J. Orthopsychiat.*, 2, 58-67.
- 牧田清志他 1964 いわゆる仮性精神薄弱を疑われた児童の治療過程とその精神力学, 児童精神医学とその近接領域, 5, 188-194.
- 丸山良二 1927 親の職業と其子の知能. 教育心理研究, 第2巻(小見山栄一, 最近の知能研究, 心研32, (1962) 405-413 による。)
- 村松常雄・勝野井輝美 1943 精神薄弱者の社会的予後, 精神経誌, 47, 73-115.
- McNemar, Q. 1940a A critical examination of the University of Iowa studies of environmental influence upon the I. Q., *Psychol. Bull.*, 37, 63-92.
- McNemar, Q. 1940b More on the Iowa I. Q. studies. *J. Psychol.*, 10, 237-240.
- McNemar, Q. 1945 Note on Wellman's re-analysis of IQ changes of orphanage preschool children. *J. genet. Psychol.*, 67, 215-219.
- Mickekon, P. 1947 The feeble-minded parent: a study of 90 cases. *Amer. J. ment. Defici.*, 51, 644-653.
- 三隅二不二 1954 狼に育てられた人の子の記録——カマラの記録の信頼性について——, 教育と医学, 2, 42-47.
- 文部省 1953 特殊児童判別基準とその解説, 光風出版。
- 森本英之 1965 10年間“門外不出”の三姉弟, 週間朝日12月24日号。
- 守屋光雄 1964 乳幼児の家庭保育と集団保育に関する保育心理学的研究——ホスピタリズムを中心として——, 立命館文学, 7, 1-49.
- Muench, G. A. 1944 A follow-up of mental defectives after eighteen years. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 39, 407-418.
- 中島 力 1955 僻地児童・生徒の知能実態, 教心研, 2, 17-22.
- 名久井良作 1964 精神薄弱の Incurability について, 岩手大学学芸学部年報, 23, 29-49.
- Nietz, J. A. 1928 What does the Terman Group Test of Mental Ability measure? *Univ. Pittsburgh, School of Educational Journal.*, Jan.-Feb.
- 日本児童精神医学会 1964 AAMD 分類の特集. 児童精神医学とその近接領域, 5巻3号。
- 日本精神薄弱者愛護協会 1965 精神薄弱施設の退園者の結婚に関する調査, 愛護, 12, 1-20.
- 岡本奎六 1954 ウェルマン女史の知能発達説, 児童心理, 8, 62-67.
- Poreus, S. D. & Corbett, G. R. 1953 Statutory definitions of feeble-mindedness in U. S. A. *J. Psychol.*, 35, 81-105.
- Pringle, M. L. K. 1965 *Deprivation and Education*. London: Longmans.
- Riesmann, F. 1962 *The Culturally Deprived Child*. New York: Harper.
- 労働科学研究所 1960 日本の生活水準 第3編生活水準と知能。
- 桜井芳郎・高乗公子 1964 日本に於ける成人精神薄弱者福祉問題の展望と今後の課題, 精神衛生資料, 11, 33-65.
- Schmidt, B. G. 1946 Changes in personal, social and intellectual behavior of children originally classified as feeble-minded. *Psychol. Monogr.*, 60, 1-144.
- Schmidt, B. G. 1948 A reply. *Psychol. Bull.*, 45, 334-343.
- Sherman, M. 1945 *Intelligence and its Deviation*. New York: Ronald.
- 嶋田和正・橋本瑞代 1965 長期入院児の精神衛生, 小児科臨床, 18, 48-54.
- Simpson, B. R. 1933 The wandering IQ: it is time for it to settle down? *J. Psychol.*, 7, 351-367.
- Skeels, H. M., Updegraff, R., Wellman, B. L. & Williams, H. M. 1938 A study of environmental stimulation—an orphanage preschool pr-

- object. *Studies in Child Welfare*, Vol. 15, No. 4.
- Skeels, H. B. & Dye, H. B. 1939 A study of the effect of differential stimulation on mentally retarded children. *Amer. Assoc. Ment. Defici.*, 44, 114-136.
- Skodak, M. 1938 The mental development of children whose true mothers are feeble-minded. *Child Developm.*, 9, 303-308.
- Slater, E. 1944 Genetics in psychiatry, *J. ment. Sci.*, 90, 17-35.
- Sloan, W. & Harman, H. 1947 Constancy of IQ in mental defectives. *J. genet. Psychol.*, 71, 177-185.
- Simth, M. W. 1954 Wild children and the principle of reinforcement. *Child Developm.*, 25, 115-123.
- Snygg, D. 1938 The relation between the intelligence of mothers and of their children living in foster homes. *J. genet. Psychol.*, 52, 401-406.
- ソビエト教育科学アカデミア 1963 ソビエト教育科学辞典. 明治図書.
- Speer, G. S. 1940 The mental development of children of feeble-minded and normal mothers. *39th Yearbook*, N. S. S. E. Part II, 309-314.
- Stevens, H. A. & Heber, R. eds. 1964 *Mental Retardation—A Review of Research*. Chicago Univ. Chicago Press.
- Stippich, M. E. 1940 The mental development of children of feeble-minded mothers: a preliminary report. *39th Yearbook*, Part II, 337-350.
- 杉田裕・藤島岳・小出進 1961 精神薄弱児の社会的予後(1)―(4). 精薄研, 28-32.
- 高木隆郎 1960 乳幼児期における母子関係の障害(Ⅱ) 心理学評論, 4, 101-118.
- 武村一郎他 1965 避地(離島)児童に関する精神医学的研究, 児童精神医学とその近接領域. 6, 133-145.
- 田坂重元・福井セキ 1965 Hospitaism と精神衛生, 小児科臨床, 18, 55-61.
- Thorndike, R. L. 1940a Constancy of the I. Q. *Psychol. Bull.*, 37, 167-186.
- Thorndike, R. L. 1940b Retest changes in the IQ in certain superior schools. *39th Yearbook*, N. S. S. E., Part II, 351-361.
- 辻村泰男 1960 ホスピタリズム「現代教育心理学大系 第14巻」中山書店.
- 津守真 1954 社会階級と子供の扱い方及びその影響の関係, 児童心理と精神衛生, 22, 60-80.
- Weintrob, J. & Weintrob, R. 1912 The influence of environment on mental ability as shown by Binet-Simon Test. (小見山栄一, 最近の知能研究心研 32, (1962), 405-413 による.)
- Wellman, B. L., Skeels, H. M. & Skodak, M. 1940 Review of McNemar's critical examination of Iowa studies. *Psychol. Bull.*, 37, 93-111.
- Wellman, B. L. 1944 Binet IQ changes of orphanage preschool children—a re-analysis. *J. genet. Psychol.*, 65, 239-263.
- Wheeler, L. R. 1932 The intelligence of East Tennessee mountain children. *J. educ. Psychol.*, 23, 351-370.
- Wheeler, L. R. 1942 A comparative study of the intelligence of East Tennessee mountain children. *J. educ. Psychol.*, 33, 321-334.
- Whiting, J. M. & Child, I. L. 1953 *Child Training and Personality*. New Haven: Yale Univ. Press.
- Worbois, G. M. 1942 Changes in Stanford-Binet IQ for rural consolidated and rural one-room school children. *J. exp. Educ.*, 11, 210-214.
- Zingg, R. M. 1940 Feral man and extreme cases of isolation. *Amer. J. Psychol.*, 53, 487-517.
- Zingg, R. M. 1941 Reply to Professor Dennis's "The significance of feral man." *Amer. J. Psychol.*, 54, 432-435.
- 全日本特殊教育研究連盟 1965 特殊学級および養護学校卒業生の実態, 精薄研, 82, 34-45.

(1966年4月6日原稿受付)